

第四十節の隠された歴史——第二十一番

第二の災い——その八——第二のエゼキエル

Jeff Pippenger

2026-08-05

エゼキエルは、ユダの部族の獅子によって教えの働きが成し遂げられた者たちを表しており、その基本的な教えは「教えに教えを加え」です。

主は彼らにこう言われた。「これこそ、疲れた者を憩わせる安息であり、これこそ、いこいである」と。だが、彼らは聞こうとしなかった。こうして主のことばは彼らにとって、「戒めに戒め、戒めに戒め、教えに教え、教えに教え、ここに少し、そこに少し」となり、それは彼らが行って後ろに倒れ、打ち砕かれ、震にかかり、捕らえられるためであった。イザヤ 28:12, 13.

現在、ユダ族の獅子がエゼキエル書を開いておられる。エゼキエルは第三十年にある祭司であると示されているが、この「三十」が祭司としての彼の象徴的年齢を表すのか、あるいはヨシヤの大ヨベルに始まった預言的系列における第三十年を表すのかは定かではない。終わりの日における最後の祭司職は十四万四千人であり、古代の文字どおりの歴史は、終わりの日における象徴的歴史を予表している。

しかし、あなたがたは主の祭司と呼ばれ、われらの神の奉仕者と称えられる。あなたがたは異邦人の富を食し、その栄光において誇るであろう。イザヤ 61:6.

エゼキエルは終わりの日における神の民の象徴であり、あらゆる預言的証言が指し示す聖なる歴史そのものである。その聖なる歴史とは第三天使の運動であり、それは1840年の第一天使の運動によって、とりわけ予表されていた。第一天使の運動は三天使のアルファの天使の運動であり、第三天使はオメガの天使である。したがってエゼキエルは、十四万四千人の印を押される時におけるペテロと一致している。ペテロとエゼキエルの両者が置かれているその象徴的歴史は、パニウム（パン）の歴史として表されている。

小さな巻物

エゼキエルは、ヨハネが『黙示録』第十章で行ったように、その小さな巻物を取る。

しかし、人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞け。あの反逆の家のように反逆してはならない。あなたの口を開いて、わたしがあなたに与えるものを食べよ。わたしが見ると、見よ、一つの手がわたしに差し伸べられており、見よ、その中に巻物があった。彼はそれをわたしの前に広げた。それには表にも裏にも文字が記されており、その中には哀歌と嘆きと災いのことばが記されていた。さらに彼はわたしに言われた、「人の子よ、あなたが見いだすものを食べよ。この巻物を食べて、行ってイスラエルの家に語れ。」そこでわたしが口を開くと、彼はその巻物をわたしに食べさせた。そして彼はわたしに言われた、「人の子よ、わたしがあなたに与えるこの巻物を腹に食べさせ、腸をそれで満たせ。」そこでわたしがそれを食べると、それはわたしの口に甘く、蜜のようであった。エゼキエル 2:8-10, 3:1-3.

黙示録第十章において、ヨハネは小さな巻物を食べるが、その章全体は、1840年8月11日から1844年10月22日までの、神の力の顕現を表している。

「第三天使のメッセージの宣言においてこれと結び合わされる天使は、その栄光をもって全地を照らすのである。ここには、世界的な広がりとは異例の力をもつ働きが予告されている。1840年から1844年にかけての再臨運動は、神の力の輝かしい顕現であった。第一天使のメッセージは世界のあらゆる伝道地にまで携えられ、またある国々においては、十六世紀の宗教改革以来、いかなる地においても見られたことのないほどの大いなる宗教的関心が起こった。しかし、これらをも上回るものが、第三天使の最後の警告のもとにある力強い運動によって現されるのである。」『各時代の大争闘』611ページ。

エゼキエルは『黙示録』第十章においてヨハネと一致しており、したがって、十四万四千人の封印の時に、ペテロ、ヨハネ、エゼキエルは、それぞれ割り当てられた持ち場において共に立つのである。

1840年から1844年までは、1299年7月27日に始まった百五十年の期間をもって開始された時の預言が始動して以来の四年間を表している。その「五か月」は終わりを迎え、1840年8月11日に完結した三百九十一年と十五日の時の預言と結び合わされ、そのとき、神の力の栄光ある顕現が1844年10月22日に至るまで現された。それ以後、預言的時の適用は終止した。

また、天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものとなを創造された、世々限りなく生きておられる方をさして誓い、もはや時がないであろうと言った。黙示録 10:6。

預言的時は、1844年10月22日をもって、預言の正当な適用として終結した。エゼキエル、ペテロ、ヨハネは、それぞれ第一天使および第二天使の運動、また第三天使の運動に属する神の賢いおとめたちを表している。

幻象

エゼキエル書の最初の「十一」章は、第一章第一節に示されているとおり、一連の「幻」を提示している。

さて、第三十年の第四の月の五日、わたしがケバル川のほとりで捕囚の民の中にいたとき、天が開け、わたしは神の幻を見た。エゼキエル1:1。

最初の十一章の「幻」は、まず第一章においてケバル川のほとりで与えられ、次いで第三章の「平地」における幻においてさらに詳しく示され、そして再び第八章のエルサレムにおける幻において示された。ケバル川、平地、エルサレムという三つの場所は、共に一つの幻を構成する三つの幻を表しており、それがすなわち第一節の、また最初の「十一」章の「幻」である。

ヨベルの年

第三十年を、ヨシヤの著名な過越祭に始まり、その後十月二十二日に終わったヨベル周期の第三十年とみなすことは、十分に裏づけることができる。なぜなら、その特定の聖なる歴史の系統は、明確に、すなわち一行また一行と、複数の証人によって描き出されているからである。一例を挙げれば、過越祭は春の例祭を表し、贖罪の日は秋の例祭を表す。したがって、レビ記二十三章は、ヨシヤに始まったヨベル周期と一致している。ヨシヤ王によって表象された歴史から紀元前573年十月二十二日に至るまでの歴史と一致する、ほかの系統も存在する。ヨベルの年が紀元前573年十月二十二日に歴史的に成就したことは、歴史家たちによって支持されている。

年代学者たちは一般に、贖罪の日を紀元前573年10月22日に位置づけることに異論はなく、またヨシヤの大いなる過越も紀元前622年とすることは、それら聖書年代学者たちの間で受け入れられている年代である。春の祭りの象徴である過越は、四十九年のヨベル周期を開始し、その周期は、贖罪の日における秋の祭りの象徴に至って終結した。四十九年を成した七つの年の週は、その地の安息の象徴であった。

「歴史であれ、戒めであれ、預言であれ、そのいずれの頁においても、旧約聖書は神の御子の栄光によって照らし出されている。それが神の制定によるものである限り、ユダヤ教の全制度は、福音を凝縮した預言であった。キリストについては、『すべての預言者があかしをする。』使徒行伝 10:43。アダムに与えられた約束から、族長たちの系譜を経て、律法制度に至るまで、天の輝かしい光は贖い主の足跡を明らかにした。先見者たちは、神秘的な行列のように未来の事柄がその前を過ぎゆく中で、ベツレヘムの星、来るべきシロを見た。あらゆる犠牲の中にキリストの死が示されていた。あらゆる香の雲の中に、その義が立ち上っていた。すべてのヨベルのラツパによって、その御名が鳴り響いた。至聖所の厳粛な奥義のうちに、その栄光は宿っていた。」『各時代の希望』211頁。

十七

ゼデキヤは、紀元前573年の十四年前にエルサレムが陥落したとき、バビロンへ連れ去られた。ユダヤ人の歴史家たちは、紀元前622年のヨシヤの時から573年10月22日までのヨベル周期を、第十七ヨベル周期として特定している。ラフィアの戦いからパニウムの戦いまでの期間は十七年であった。プトレマイオスはラフィアの戦いの勝者であり、南の王として十七年間統治した。ミラノ勅令からコンスタンティヌスが330年に帝国を分割するまでの期間は十七年であった。第十七ヨベル周期において、エルサレムはネブカドネザルによって滅ぼされた。

イスラエルの子らは、多くの日の間、王もなく、君もなく、いけにえもなく、石柱もなく、エポデもなく、テラフィムもなくしてとどまるであろう。その後、イスラエルの子らは帰って来て、彼らの神、主を求め、その王ダビデを求め、終わりの日に、主とその恵みとをおののきつつ慕うであろう。ホセア 3:4, 5。

ホセアが取り上げているのは、ゼデキヤの捕囚に直接かわる主題であり、同時にそれは紀元前723年における北王国の捕囚の始まりをも表している。ホセアのこの箇所がエゼキエルの証言と結びついている理由は、イスラエルが人間の王を求めて固執したとき、神を退けたことにある。神的な王ではなく人間の王によって支配されることを望んだイス

ラエルの願望は、レビ記26章の「七倍」のさばきにおいて、「あなたがたの力の誇り」として表されている。

これらすべてのことによっても、なおあなたがたがわたしに聞き従わないなら、わたしはあなたがたの罪のゆえに、さらに七倍重くあなたがたを罰する。わたしはあなたがたの力の誇りを砕き、あなたがたの天を鉄のようにし、あなたがたの地を青銅のようにする。レビ記 26:18, 19.

「あなたがたの力の誇り」は、イスラエルが世の諸国のようになり、自分たちの王を持つとした願望を表している。紀元前723年に北王国から王が取り去られ、続いて紀元前586年に南王国の王ゼデキヤが捕囚に至ったことは、古代イスラエルの「誇り」が打ち砕かれたことを示しており、しかも高慢は破滅に先立つ。聖書預言において「力」とは王または王国を意味し、人間の王を確保しようとしたことに示されたイスラエルの誇りは、神政政治と神なる王を退けたしるしである。

サムエルが年老いたとき、彼はその子らをイスラエルのさばきつかさとした。長子の名はヨエル、次子の名はアビヤであり、彼らはベエル・シェバでさばきつかさであった。ところが、その子らは父の道に歩まず、利得を求めて道をそれ、わいろを取り、さばきを曲げた。そこでイスラエルの長老たちはみな集まり、ラマにいるサムエルのもとに来て、彼に言った。「ご覧ください、あなたは年老い、あなたの子らはあなたの道に歩んでおりません。今、すべての国々のように、私たちにさばく王を立ててください。」しかし、「私たちにさばく王を与えてください」と彼らが言ったこのことは、サムエルの目に悪しきことであった。そこでサムエルは主に祈った。すると主はサムエルに言われた。「民があなたに言うことを、ことごとく聞き入れよ。彼らはあなたを退けたのではなく、このわたしが彼らの上に王として治めることを退けたのである。わたしが彼らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、彼らが行ってきたすべてのわざ、すなわち、わたしを捨てて他の神々に仕えてきたそのとおりに、彼らはあなたにもしているのだ。それゆえ今、彼らの声を聞き入れよ。ただし、厳かに彼らに警告し、彼らを治める王のならわしを示さなければならない。」サムエル記上 8:1-9.

この点において注目すべきことは、イスラエルが自分たちの王としての神を退けたのみならず、サムエルによって代表される預言の霊をも退けたことである。というのは、「彼らはわたしを捨てて、ほかの神々に仕えてきたが、あなたに対しても同じようにしている」と記されているからである。

「サタンは……絶えず偽りのものを押しつけて、真理から人々を引き離そうとしている。サタンの最後の欺きそのものは、神の御霊の証を無効なものとするものである。『幻なければ民はほしいままにふるまう』（箴言29:18）。サタンは、さまざまな方法で、またさまざまな手段を通して巧妙に働き、神の残りの民が真実の証に寄せる信頼を揺るがそうとするであろう。

「証しに対して、サタンの憎悪がかき立てられるであろう。サタンの働きは、教会がそれらに対して抱く信仰を動揺させることである。その理由はこうである。もし神の御霊による警告と戒めと勧告とに聞き従うなら、サタンは自らの欺瞞を持ち込み、その惑わしによって魂を縛るための、これほど明白な道筋を持ち得ないからである。」

『セレクトッド・メッセージズ』第1巻、48頁。

古代イスラエルの神政政治に対する最後の欺きは、神のみならず、預言の霊をも拒絶することであった。紀元前1097年におけるその拒絶は、1863年におけるラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチズムの最後の欺きを予表している。レビ記二十六章の「七つの時」は神の御言葉であり、「七つの時」について預言の霊は、それが「変更されるべきではない」と述べている。

「私は、1843年の図表が主の御手によって導かれたものであり、それは変更されるべきではないことを見た。そこに記された数字は、主がそれを望まれたとおりのものであった。主の御手がその上にあり、いくつかの数字の中の一つの誤りを隠しておられたので、主の御手が取り除かれるまでは、だれひとりそれを見ることができなかったのである。」『初代文集』74頁。

預言の霊は明らかに「七つの時」を是認しており、彼女のその是認は、図表上の数字を変更してはならないという警告であった。その図表において、「七つの時」は中央の欄であり、また右上隅にも置かれている。1863年におけるウライア・スミスの偽造図表とともに、神を退けた古代イスラエルによって予型された、基礎的真理の漸進的拒否が生じ、預言の霊は1863年のその反逆を特定した。1863年の反逆という年代は、エゼキエル書に提示されている預言の系譜と一致している。その歴史の系譜における結末はエルサレムの滅亡であり、それは日曜法を予型していた。1863年から間もなく到来する日曜法に至るまでの期間は、紀元前1097年のサウル王の歴史から紀元前586年のゼデキヤに至る歴史によって予型されていた。

ゼデキヤは、前573年のヨベルの十四年前にバビロンへ捕囚として連れ去られた。第十七のヨベル周期は前622年に始まり、第三十年にエゼキエルは前591年に祭司として立てられ、その後五年して、前586年にエルサレムは滅ぼされた。それは、西暦70年にティトゥスによって二度目に滅ぼされた時と同じ暦日のことであった。エゼキエル書第一章第一節は、エルサレムの滅亡の五年前であり、第四十章の神殿の幻の十九年前に当たる。

われわれの捕囚の第二十五年、年の初めの月の十日、すなわちその町が打たれてから第十四年のその日、主の御手がわたしの上にあり、わたしをそこへ連れて行った。エゼキエル 40:1。

地の安息年の契約に対する不従順のゆえに、神は、その地の安息日である第七年に対する不従順への呪いは「七倍」とであると明示された。「時」は一年であり、「一年」は三百六十日であり、七倍の三百六十日は二千五百二十年である。ミラー派は「二十五二十」という表現を用いてはいなかったかもしれないが、彼らの両方の聖なる図表は、数的に二千五百二十年を示していた。

イスラエルの北王国とユダの南王国の双方に対して七倍ののろいが宣告されたことは、ウィリアム・ミラーにとって最初の、あるいは「基礎的な」、さらには「アルファ」とさえ言う理解であった。1863年、ラオデキヤ状態にあるセブンスデー・アドベンチスト教会は、ミラーの発見におけるこの基礎的理解を拒んだ。その「発見」は、ミラー派運動の全土台そのものを成していた。靈感は、このことが起こり得ると直接警告していた。そして、それは現実となり、しかもずっと以前に起こったのである。

バビロン捕囚の後に再建された神殿の基礎は、第一の勅令の歴史の期間中に、しかも第二の勅令に先立って完成した。神殿は第二の勅令の歴史の中で完全に建て上げられた。第三の勅令において、国家主権は文字どおりの古代イスラエルに回復された。ウィリアム・ミラーは、1798年に到来し、1840年8月11日に力を与えられた第一天使を代表していた。第二天使は、1842年5月に出版された1843年の図表によって表されるように、基礎が据えられた後に到来した。1844年の最初の失望、すなわち1844年のアルファの失望において、第二天使、そしてまた十人のおとめのたとえにおける延引の時も到来し、第二天使の使命がエクセターの天幕集会において力を与えられたとき、神殿は完成した。次いで、1844年の大いなる、すなわちオメガの失望において、契約の使者が突如としてその神殿に来られたが、それは第三の勅令に始まり、第三天使の到来をもって終わる二千三百年の成就であった。

ヨシヤとは、「神の基礎」を意味する。王ヨシヤであれヨシヤ・リッチであれ、両者はいずれも基礎の象徴であり、それは最初の布告の歴史において表されているとおりであり、またレビ記二十三章の最初の二十二節に示された春の祭りによって表されているとおりである。基礎、春の祭り、そして最初の布告は、いずれも一八四〇年と第一天使の力の付与の象徴である。エゼキエル書四十章一節に示されている紀元前五七三年十月二十二日は、一八四四年十月二十二日と死者の審判の開始の象徴であり、また生ける者の審判の開始における二〇〇一年九月十一日の象徴でもある。これらの記事を追ってきた者であればだれでも、私が用いている適用を知っているはずである。

エゼキエルは、その著作に示されている預言的歴史の中における一つの象徴である。第八章の終わりにおいて二十五人の者たちが太陽を拝むとき、エゼキエルはそこにいた。さらに次の諸章においても、エレン・ホワイต์がセブンスデー・アドベンチスト教会であると明示しているエルサレムの上に、「殺戮を伴う封印」がもたらされるとき、彼はそこにいた。最初の十一章において、エゼキエルはその指示を受けるために天の聖所へと導き入れられるが、それは1844年にミラー派の人々が召されたことであり、またこの運動が今まさに召されつつあることでもある。

このように、エゼキエルはあなたがたへのしるしとなる。彼が行ったすべてのとおりに、あなたがたも行うのである。そしてこのことが起こるとき、あなたがたは、わたしが主なる神であることを知るようになる。エゼキエル書 24:24。

これが来るとき

終わりの日において、エゼキエルが描き示した事柄が神の民のうちに繰り返されている。その時点に私たちが到達するとき、私たちはエゼキエルのしるしに到達したのである。エゼキエルが十四万四千人を表していることを知り、さらに、エゼキエルがその書において描き示したすべてのことが、終わりの日に十四万四千人に関わる聖なる一連の出来事を予型しているという、聖別された期待を伴う信仰と理解の域にまでそれを知るとき——その時、あなたがたは「主」が「神」であることを「知る」のである。

これらの考察は、次の記事で引き続き扱うことにする。